

ネイチャー高知

No 57 2021年7月31日発行

生物季節モニタリング調査員募集

気象庁が長年続けてきた「生物季節観測」が一部（あじさい、いちょう、うめ、かえで、さくら、すすきの植物6種）を除いて廃止されるということが昨年11月に発表されたことを覚えている方は多いと思います。日本自然保護協会から再考を求める意見書が出されたほか、多くの市民、団体から継続を求める声が上がっていました。その結果、国立環境研究所が事務局となった「調査員調査」が開始されることになり、現在調査員が募集されています。

調査の方法の詳細については、下記国立環境研究所のウェブサイトをご覧のうえ、積極的に参加ください。

■調査の趣旨と方法について

https://adaptation-latform.nies.go.jp/plan/institute_information/information_01.html

■調査参加、もしくは調査説明会への参加のエントリーフォーム

<https://forms.gle/4i6EGAts2a3YqbU28>

【調査員の募集に協力している日本自然保護協会からの補足説明（一部抜粋）】
調査の多くは「対象生物の初見や初鳴き」なので、まじめに行うと高頻度での観察が必要となります。ただ、今回は従来の調査地である气象台だけでなく、お好きな調査地をエントリーすることも可能となっています（もちろん气象台に近い方は大歓迎です）。また調査対象も、本来はかなりの種類がありますが、一部の生物だけでも実施いただけることになりました。

日頃から自然観察をされている自然観察指導員の皆さまであれば、ご自宅周辺やマイフィールドにおいて取り組める方も多いのではと思います。

国際的にも意義の高い調査ですので、是非ともご協力いただけますと幸いです。

なお、交通費の実費支給などは国環研の方で検討されているものの、基本的にはボランティアベースでの市民調査となります。また今回は「どうすれば市民調査員とともに安定的に調査を広げていけるか」を模索するフェーズともなっており、どちらかと言えば「共同調査研究者」という形での協力を先方としては望まれています。調査をしながらいろいろと意見や工夫をお伝えいただくとありがたいというものです。

地域の交流人口拡大とない賑わいの場所への期待

～令和3年4月 安田川アユおどる清流キャンプ場リニューアルオープン～

松本 孝（自然観察指導員）安芸市土居

高知県県政だより「さんSUN高知」7月号の今月の表紙「活性高知！最前線シリーズ16」に大幅リニューアルオープン！安田町の安田川アユおどる清流キャンプ場が掲載されています。私は4月の地元新聞掲載記事を見てこのリニューアルオープンを知りました。

同キャンプ場は1993（平成5）年オープンし、施設の老朽化や利用客減少を受け再整備と知り、オープンして28年の年数を実感しました。記事より、リニューアルの監修にはアウトドアのプロでその魅力をテレビ等で伝える田中氏がされ、田中氏が経営する会社が指定管理を担当、そして田中氏がアドバイザーを務めるキャンプ用品大手ブランド「コールマン」との提携が実現したことに、私は関係する方々のご尽力に感謝申し上げるとともに、地域の交流拡大となり、賑わいの場所となるようお祈り申し上げる次第です。

と申しますのも、私は1993年オープンの同キャンプ場の計画設計業務を受託していた高知市内の造園ランドスケープの設計事務所に勤務していき、当時、私も業務に関わらせていただいております。オープン初日は私が所有するキャンプ道具も持って、事務所スタッフあわせてデイキャンプに行ったことでした。同キャンプ場は賑わい、キャンプ場近くに酒屋さんがあって、キャンプ場、酒屋さん共に賑わっていると聞いたこともあります。キャンプ場の前を車で通った際は、キャンプを楽しんでいる様子を何度も見ました。

私は平成になった頃はよく野外活動に出かけていました。そういえば夏場の出張で野外調査の際、民宿や旅館などが家族連れでどこも満室だったときがあり、河原のキャンプ場にテントを設営しテントの中でまとめていたことも思い出しました。

平成5年頃以降、キャンプから遠ざかって久しく、ここ数年、テレビで田中氏の番組を見て野外活動の楽しみを今一度思い起こすことができ、再びキャンプに出かけてみようかの気持ちになれたところでした、その田中氏がこのキャンプ場を監修され、このキャンプ場はコールマンとの提携が実現したことに本当に有り難く、心より嬉しく思っています。

キャンプ場の約30年の時が、より成熟した空間となり、リニューアルで更に魅力付けがされていることを楽しみに、時間をみて同キャンプ場へ行き、穏やかな時間を空間とともに感じながら過ごしたいと思います。そして長い間、使っていない所有するコールマンのシングルバーナー、ツーバーナー、ランタン（全てホワイトガソリン使用）の再デビューは、まずこのキャンプ場からと思っています。

■1993（平成5）年オープン時の安田川アユおどる清流キャンプ場と私



山の形や建物をヒントにこの場所を探してみます



ツーバーナーで料理

わたしのフィールドノート 「牧野さんの道」を今年も歩く

田城 光子

久しぶりに「牧野さんの道」を歩いた。牧野さんの道とは、明治22年8月、まだ20歳代だった牧野富太郎先生が植物採集をしながら、7名の同行者たちとたどった道である。現在の四万十市江ノ村から三原村に入り、村内で3泊(?)して上長谷、宮ノ川、広野、柚ノ木など各所で採集した植物名や宿泊中のエピソードなど、同行の岩本嘉弥太によって綴られた旅行記から知り得た幾筋かの道を、わたしたちは親しみを込めて「牧野さんの道」と呼び、その足跡を辿ることに誇りと喜びを感じている。その中の江の谷ルートは、今は舗装され車で行くことができ遍路道としても利用されている。道に沿って流れる小川には貴重なトンボが生息することもわかっている。このあたりは昔からの米どころで、どぶろく街道の名でも呼ばれ、今でもどぶろくを作っている農家が多い。そんな江の谷で、今年度から始まる高知県の野生植物調査に関する研修会が行われ、参加した。

梅雨の晴れ間、色を濃くした緑の中に、咲き始めたリョウブの花の白が目を引き。ときおり小鳥の音がこもればの間から聞こえてくる。姿は見えないが、あれはサンコウチョウの声だ。今日は植物の勉強に来ているのだが、それ以外の生き物すべての気配も気になる。

初めて標本採集をするという人が、シダをさげてとても嬉しそうに戻ってきた。「これが孢子葉というんですって。こんなにきれいに採れて、良い標本になると言われました。タカサゴキジノオというシダだそうです」そして丁寧に新聞紙を使って仮押しをしていた。この人は、きっとこのシダのことをずっと忘れないだろうな、と思った。これまでにたくさんの植物に出会い、形態や生態を観、名前を知ってきたが、少し植物から離れているともう忘れてしまったものがたくさんある。道端や草むらの中のありふれたものに、それは多い。なかなか名前がわからず、何度も顕微鏡をのぞき、片っ端から図鑑や資料を引っ張り出して調べ、苦勞の末にわかったものは、比較的よく覚えている。逆に簡単にわかったものは、今、名前が出てこない。牧野さんがそばにいてくれたら葉っぱ1枚で「〇〇ですよ」と教えてくださるのだろうが、それはわたしのためには決して良いことではない。もう一度初心にかえって、きちんと観察することから始めよう。この日は道端や側溝に生えているオトギリソウの仲間を、自信を持って見分けられるということを目指した。オトギリソウの仲間は、黒点や黒線の有無、たくさんの雄しべの付き方(3束になったものとならないもの)などを観察すれば同定ができるのだが、わたしの脳みそからすっかり検索表の記憶が消えていた。その結果、この日観察したのは、オトギリソウ、ヒメオトギリ、ナガサキオトギリの3種であった。自分の手で採集し、ていねいに観察し、自分で分かるまで調べる。他の生き物たちとの関係もわかればなおよい。そしてわかったものは、長く記憶に残る。真っ白いシャツに蝶ネクタイの牧野さんが「うん、うん、そのとおり」と、笑いながらうなずいてくれる姿がちらりと見えたような気がした。わたしは汗まみれの手ぬぐいに泥だらけの長靴で、ちょっと恥ずかしかったけれど。今年も牧野さんの道を少しでも多く歩いて、牧野さんが見たと同じ植物を観ていきたい。それがわたしの元気で長生きの秘訣である。

朝倉城址城山の植物 その2 タツナミソウ

坂本 彰

タツナミソウ(写真 A)はシソ科タツナミソウ属の植物で、牧野新日本植物図鑑によれば、立波草は「花の様子が泡立つ波ににているのでいう」とある。花の特徴をとらえた良い名前だと思う。明るい草地が好きな植物で、草を刈ったり刈らなったり、あるいは刈る時期によって出現の度合いが全く異なる。城山周辺は、きちんと定期的に草刈りをする畑や果樹園、道路法面が多く、草地が維持されているが、それでも変動は大きい。丘陵地帯全体としては、毎年お目にかかれるが、個別の生育スポットで見ると出たり出なかったりする。環境の変化に敏感な植物かもしれない。

城山を中心にした丘陵地帯にはタツナミソウ属の植物として、タツナミソウの他に、コバノタツナミ(写真 B)、シソバタツナミ(写真 C)の3種類の分布を確認している。コバノタツナミはタツナミソウの変種であるが、タツナミソウとの境界をどこで引くかは大変難しい。高知県植物誌の筆者は鋸歯の数に着目して、10対以上の鋸歯があるものをタツナミソウ、7対以下の鋸歯があるものをコバノタツナミとしている。その結果、タツナミソウの範囲が狭くなり、逆に変種のコバノタツナミが広くなるという、実体に合わない結果となっているように感じる。実際に鋸歯の数を調べてみると7以下でも10以上でもない8対程度のものが多くみられる。これらは葉の大きさや茎の基部の状態から、どちらかといえばタツナミソウの範疇とするのが良いと考える。基部で分岐し、葉が厚ぼったくて小さく、鋸歯が少ないものをコバノタツナミとし、葉がやや大きく鋸歯は8以上で、あいまいなものを含めてタツナミソウとしたほうが分かりやすいように思う。いずれにしても、定量的な区分は不可能で、境界はあいまいなものとなるし、複数の分類群を含むことになるかもしれない。

区別がつきにくいのはタツナミソウ・コバノタツナミの変種関係だけでなく、例えばタツナミソウとシソバタツナミが同じ場所に生えている場合には、両種の間隔的な形態のタツナミソウが出るし、コバノタツナミとシソバタツナミが生える場所のコバノタツナミは、コバノタツナミしか生えない場所のもの比べると、シソバタツナミぽくなってしまふ。これらの個体群においては、異なる種の間で遺伝子の交流があるのかもしれない。

シソバタツナミはタツナミソウのような明るい草地よりも林縁に生える植物で、生育場所は安定している。城山周辺だけでなく、朝倉から東へ、神田、幸崎とつながる南嶺山麓にも見られる。最近までイガタツナミとしてきたが、2017年発行された平凡社の図鑑では、これまで別種とされてきたイガタツナミ、シソバタツナミ、ホナガタツナミを区分せず、まとめてシソバタツナミとする見解が採用されている。これまでは、スレンダーなイガタツナミ、重心の低いあんこ型のシソバタツナミ(写真 D)と区分してきたが、中間的なものも存在し、これはどちら?と悩むこともあった。そうした場合にそれぞれ別種(変種)とするか、まと

めて一つの種にするか、研究者によって見解が異なることとなる。昔の文献を読んでいると、広く全体を概観できる「大御所」がおられて、細かく分けずにまとめる役割を果たしていたように受けとめていた。ところが、最近は違いをことさらに強調し、すぐに別種（変種）とする研究者が多いように感じる。今回改訂された平凡社の図鑑の筆者のような研究者が増えると、植物分類の世界ももう少し分かりやすくなるのではないだろうか。



A: タツナミソウ B: コバノタツナミ(イガタツナミとされていた集団の近くに生える個体で、イガタツナミの雰囲気を持っている) C: シソバタツナミ(以前はイガタツナミとしていたもので、節間が長く、全体の姿が細長いタイプ) D: シソバタツナミ(草丈が低く、節間が短く、下部の葉の葉柄が長いタイプ。城山周辺では確認していないが参考のために掲載した。)

撮っておきの一枚

コンメリナ・アフリカーナ



ツククサ科ツククサ属のコンメリナ・アフリカーナという斑入りのキバナツククサです。
アフリカ、マダガスカル、アラビア半島に自生しているようです。
多年草で冬季は室内で管理します。

山岡 重隆



ハスイモ



私はハスイモと聞いてもピンとこない者です。リュウキュウと呼びます。私が子どものころ、ウチの畑の柿の木の下にリュウキュウがありました。いつしか無くなって、今年、地元の種苗店でリュウキュウの苗を見つけ購入、記憶にある柿の下に植えました。6月、リュウキュウの花を見ることができました。(種苗店で購入した苗を畑に植えたもの。令和3年6月19日撮影)

松本 孝



片岡沈下橋



越知町片岡にかかる沈下橋。「竜とそばかすの姫」で話題になっている浅尾（あそお）沈下橋の下流に設置されている。浅尾の沈下橋はシャトルバスが「聖地巡礼」のアニメファンを運んでいたが、こちらの方は訪問者もなく、仁淀川にかかる沈下橋の風景をゆっくり楽しむことができた。

坂本 彰

気ままなカメラ日記

久川 信子

知ることの楽しさは、たまらない♪

6月の三宝山(金剛山)での「石灰岩地の植物観察会」は、とても楽しみで参加させていただきました。私の知らなかった植物知識はもちろん！三つの宝の内の一つを見つけた気分でした。というのも私は、三宝山好きが高じて、マイブームが何度かおきます。2018年は、直感で見つけたキツネにとりつかれたと家族も呆れるほどに巣穴探しに獣道を辿って、山の中や石狩場へ足を運んでました。その時に、三宝山が石灰岩地質なんだと知りました。

今年のブームは、その石灰岩地質な場所を好んで生息する生き物たちです。



ヒメボタル撮影日：5月13日



成虫撮影日：4月25日



幼虫撮影日：7月15日

まずは人気昆虫『ヒメボタル』です。三宝山でもとても多くの『ヒメボタル』を見ることができます。面白いのが完全な杉林や竹林よりもコンクリートが少し存在する場所に多く見られる気がします。これは『ヒメボタル』の幼虫のエサになるマイマイ類や貝類が炭酸カルシウムが多いコンクリートに集まるからだと思います。

この『ヒメボタル』の幼虫を探していると見かけるのが『マイマイカブリ』と言う昆虫です。この幼虫がまた成虫と同じくらいの大きさで、動きも速くカッコいいのです！成虫も幼虫もカタツムリをエサとします。そして、そのカタツムリには寄生虫がいます。とくに免疫がない子どもが【寄生虫に触れると？】髄膜炎になり重症化する危険ありますので触った後は、必ず手を洗うようにすすめています。というのも大阪育ちの私、高知にきた2年目に髄膜炎で死にかけました…その後、軽症で合計3回なって近年なっていません。色々な抗体ができたと思われ(笑)

あと、今年なって三宝山周辺で気掛かりなことがあります。山の裾で当たり前のように見かけていた「シジュウカラ」が3月から激減しているのです。

秋から冬にかけては「ソウシチョウ」と藪では縄張り争いしつつも、5月には毎年ヒナを見ることができました。今年「ヤマガラ」ばかりです。

探すと「ソウシチョウ」とともに標高500メートル以上の山で「シジュウカラ」を見かけます。やはり温暖化のせいでしょうか？確かに南方系の昆虫が居ついてしまいました。(ベニトンボ・ナガサキアゲハ・アカギカメムシなど)

来年は、今までどおり「シジュウカラ」の可愛いヒナが見られることを願うばかりです。

催し物のお知らせ

企画展「つなげ！高知の少ない生きものたち」

開催期間 2021年7月17日(土)～9月5日(日)
場所 高知県立牧野植物園展示館 企画展示室・植物画ギャラリー
主催 高知県立牧野植物園
企画・運営 公益財団法人高知県牧野記念財団
協力 認定特定非営利活動法人四国自然史科学研究センター
越知町立横倉山自然の森博物館

標本貼付デモンストレーション

植物標本をつくるようすを見学できます（※参加費無料、申込不要）。
期間中の土日祝日 10:00～12:00、13:00～15:00

サイドイベントの紹介

サイドイベントとして、ワークショップ「生きもの調査やってみよう」③昆虫類調査や講演「四国のツキノワグマ」などがあります。詳しくは牧野植物園 HP <https://www.makino.or.jp/event/detail.php?id=446> をご覧ください。

編集後記

無事に No.57 号を発行できました。お忙しい中、執筆・写真撮影に時間を割かれ、投稿いただいた皆様に感謝・感謝です。

新型コロナウイルスの感染者数が都市部を中心に「過去最多」が記録されていく中で、公共放送は E テレまで動員してオリンピックを放送しています。オリンピック開催に伴う「楽観バイアス」によって、感染症拡大に対する危機感が薄れ、感染拡大に歯止めがかからないのではないかと危惧します。

高知県で初めて熱中症警戒アラートが発令されたというニュースを聞きながら、編集作業をしています。この暑さはネイチャー高知 No.27 がお手元に届くころにも続く見込みです。暑い中ご自愛ください。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報
No. 57 2021年7月31日発行

事務局 780-8075
高知市朝倉南町 3-51-1 坂本彰 方
TEL&FAX 088-850-0102
E-Mail s-akira@mvd.biglobe.ne.jp